

芸文 TOPICS

例年以上に一丸となった今年の卒業発表会

芸能文化科学科長 久下 英孝

経験したことのない長期にわたる休校は教員はもちろん生徒も初めて。単純に練習時間が短いだけでなく、そもそも開催に踏み切っているものか。先が見通せない中、関係の各方面との調整を進め、開催を決断して今回の第26回卒業発表会となりました。



3月、卒業式が終わり、いよいよ本格的な下準備に入る時期に自宅待機を余儀なくされました。下準備と言いながら、計画や方針など動き出す前の重要な会議などを集合してではなく、生徒たちはLINEなどの機能を活用して進めていっていましたが、やはり対面で行えない会議は有効に進まず、苦勞したようです。

そして、卒業発表会は3学年がかみ合いながら動く行事であり、3年生の会議がうまく進まない以上にはばばらな状態でしたが、生徒たちはよくやり切ってくれました。

1年生は入学式もなく高校生活が始まったかもわからない中での不安なスタートでしたし、2年生はそんな1年生を率いて3年生を支えてくれました。当然3年生がいちばん頑張ってくれました。何をすることも感染対策、そして与えられた限られた時間。そんな条件下でも1・2年生に対しては、芸文の顔として芸文の看板を背負った責任ある自分たちの姿を示してくれました。

そして、現役生だけでなく、卒業生からもたくさんの応援をいただきました。応援したくても足を運ぶことができないような情勢で、もちろん、発表会当日も会場には入れない。今年初めて行ったYouTubeでのライブ配信が唯一の応援窓口

のような形。多くの卒業生がモニターの前で応援してくれていたと思います。また、特別非常勤講師の先生方からの特別な配慮、本校職員からの応援などさまざまなパワーに包まれて大成功に終わることができました。例年と変わりなくですが、むしろ例年以上に芸文一丸となって試練を乗り越えた今年の卒業発表会でした。

現役の先生より



令和2年度3年生学年主任
島本 一彦

入学式の日、式の前にトレルで「君たちの最初の晴れ舞台だからしっかりやろう！」という話をして、その時の全員の顔がしっかりこちらを向いていた事を昨日のように思い出せる。あれから3年の月日がたった。私事であるが、昨年3月で定年を迎え、再任用と言う形で最後まで担任、学年主任を全うできた事を嬉しく思う。

1年の思い出は校外学習。近鉄の鉄橋が破損し、急遽バス会社の協力を得て、いくつかの駅で生徒を乗せ、全員参加で

バーベキューができたこと。

2年は修学旅行。コロナ前で、無事台湾に行くことができ、異文化にどっぷりつかって交流ができたことは、生徒たちにとって貴重な経験になった。私は8回台湾に行ったが、晴れの九份は初めてで、「この学年は持っているな。」と感じた。

しかし、3年はコロナの影響下、2か月の休校に始まり、学校行事の集大成と言える体育祭が中止となってしまった。学年集会で体育祭ができないことを説明し、「納得はできないだろうが受け入れて欲しい。」と伝えた時の全員の真剣な表情が印象に残っている。

休校期間をうまく使えたのか、その後の模試やスタサポは順調な仕上がりを見せ、10月は毎週のように土曜授業、模試を繰り返したが、しっかりと乗り切ってくれた。

私以外は若い先生方が多い担任団であったが、チームワー